

街巡りはインフラ巡り

藤浪 武史



定期的な運動と通勤時の新型コロナウイルス感染抑制のため、週に一度ほど自転車の利用に努めている。札幌市内を距離は約12km、走行時間1時間弱の通勤である。約50年前に直線化した区間の国道を通り、旧国鉄千歳線跡のサイクリングロードを經由し、林業試験場跡の豊平公園前を経て職場に到達する。時間にゆとりのある時には寄り道も楽しい。サイロの隣の牧舎を町内会館に改造し、それらが公園に隣接して保存されている区画を見つけた。採草場が起伏をもって広がる、宅地化前の札幌を思い浮かべることができた。そして新たな気づきもあった。国土地理院ホームページにある1961年の航空写真で見つけた札幌ドームスタジアム西側の街路の形状が面白い。北東端は放物線状の街路が、南西端は中核となる公園とそこに集まる街路が見えた。当時では先進的な住宅地計画と思われる。計画地の中央を国道36号が走り、そこには円形交差点も一カ所見られた。早速自転車で現地確認した。それはちょっとした昭和史巡りの気分であった。

街巡りは、街の変化を感じ取ることもできる。河川に隣接した雪堆積場が商業施設になり、都心部では隣接する御屋敷跡に中規模マーケットが移転拡充し、元の場所が広い駐車場となっていた。そして、駐車場管理が自動化されていた。周囲では校舎や公的機関の建物は斜めの筋交い部材によって耐震化され、再開発で高層化したビルも多い。大雑把に言うと、平成の街並みは、効率化、耐震化および高層化と呼べるかもしれない。これらが時間を経てどれだけ魅力を高めていくか期待したい。そして、平成史巡りが流行する時期を待ち望んでいきたい。

多くの方が当たり前と感じている現在の生活も、これまで整備されてきた公共施設のストック効果の恩恵を受けている。土木に関する仕事をしている筆者には、特に土木施設による下支え効果を多くの方に認識

して欲しい。これらの期待に対して、ダムカード等の各種施設案内カードは有効に機能し、多くの方にその施設の役割を気づかせている。もちろん手段であるカード収集に関心を持ち、後から施設巡りを始めた方もいるだろう。さらに深掘りすると、その施設が必要とされた時代背景、例えば、都市人口の増加、建設資材や機材の制約あるいは間に合わせねばならないイベント等があるはずである。これらのどの要因に当てはまるのか、時の流れを遡って思いを巡らせてみる。

ここで、個々の公共施設や土木施設だけでなく街並みを一体的にインフラ（産業や生活の基盤）と考えてみる。2025年までを対象期間とする社会資本整備重点計画では、インフラに対して、整備段階、維持管理および利活用段階まで視野に入れた時間軸という考え方を打ち出している。また、インフラは世代を超えて共有する資産として、そのストック効果を最大化させる重要性を指摘している。これらのことは、将来起こると考えられる変化、例えば自然災害の激甚化、高齢社会、二酸化炭素低排出社会そして地球規模の感染症流行等に対して、インフラは耐性を持ち悪影響を最小限に抑えることを求められている。

寒地土木研究所では、自然災害からいのちと暮らしを守り、持続可能なインフラに向けた維持管理および魅力的な地域や社会づくりに対応する研究を行っている。そして、これらの研究により、非日常的な増水時の堤防や、利便性快適性の高い道路による日常的な自動車移動等、土木施設による下支え効果の認識を多くの方々に高めていきたい。また、災害発生前の的確な避難や吹雪予測時の外出回避等、生活様式の適切な変化を後押ししていきたい。そして、多くの方が散策、サイクリングおよびドライブ等の活動において、街並みや沿道等の空間への関心を持てるようになっていきたい。これらを通して、多くの方々がインフラを一層身近に感じられるよう努めていく所存である。